

女性教職員活躍事例集Ⅱ

～管理職への道のりと伝えたいメッセージ～

函館市立千代田小学校 高村校長

Q お伝えしたいメッセージをお願いします！

学校ではいい意味で女性・男性という性別が、世間的には意識されにくくなってきたかなと感じていますし、学校運営においても「責任ある仕事は男性がやるだろう」という考えではなく、女性自身も変わっていかなければならないと思います。

女性管理職が増えて、女性管理職の印象もいい方向に変わってきたなど感じますが、ある日のこと「校長先生は、おじいちゃんじゃないんだ～」と1年生の児童から言われました。女性管理職が活躍することで、そのような世間的な認識も、いつか変わっていくのではないかと思います。



Q 管理職を志した理由やきっかけは？

30代の頃は管理職を目指す気持ちはありませんでしたが、40歳になって赴任した学校の校長先生をはじめ、素晴らしい管理職の方々から管理職を勧められたことと、その学校で教務主任として学校がより良い方向へ変わるよう全ての職員と取り組み、「学校は自然に変わるのではなく、自分たちで学校を変えることができる！」と思ったことが、管理職を意識するきっかけであり、志した理由です。

Q 管理職になるために必要だった支援は？

「自分は管理職には向いていないな」と思っていたのですが、「管理職に向いているかどうかを考えるのは、自分ではないよ」と校長先生から言われ「なるほどな」と思いましたし、管理職選考の受検前から教頭として必要な配慮などを教えてくださる方々が周囲にいましたので、そのような後押しも必要だったと思います。

Q 管理職になって気づいたことは？

一番大きな気づきは、自分が思っていた以上に、たくさんの方が学校のことを考えたり、支えたりしてくれていることです。教員の時は、どうしても自分の学級や保護者のことで精一杯になり、学校の中しか見えなくなる傾向がありますので、視野が広がったと思います。

もう一つの気づきは、自分自身が学び続けたいいけないことです。今までの経験だけでは学校は変わらないし、学校をより良くするために、決断が間違った方向に向かわないためにも校長は学び続け、アップデートすることが大事です。

Q 管理職のやりがいや魅力は？

子どもたちと職員の頑張りや成長を、誰よりも感じられること。そして、たくさんの人と出会いながら自分自身を高めていけるところが、やりがいや魅力だと思います。

また、子どもたちの良さ、先生方の頑張り、学校の素晴らしさを外部に発信できるのも管理職の魅力ですね。

Q 後輩教職員へのメッセージは？

メッセージは5つ。「新しいことにチャレンジして欲しい」「自分らしさを出して欲しい」「自然体で日々の仕事に臨んで欲しい」「人間関係を大切にしたい」「休むことを大事にして欲しい」以上です。

Q 管理職として子育てを始める職員に対し気をつけていることは？

子育ては女性だけがするものではなく、男性と共にやるものなので、性別に関係なく子育て中の職員が遠慮せずに休みを取得できる、職場全体でフォローできる、困った時は助け合える環境づくりを、常に意識しています。

次ページからインタビューの全文を掲載しております！是非御覧ください！

1・管理職を志した理由やきっかけを、お聞かせください。

30代の頃は、管理職を目指す気持ちは全然ありませんでしたが、40歳になって赴任した学校の校長先生から「この学校から異動する時は教頭だな」と言われました。

その時、私は「いえ、学級担任の方が絶対楽しいです。教頭先生が楽しそうには見えません」とお話ししましたが、実は、校長先生のその言葉が、管理職を意識するきっかけとなりました。今思うと、随分ひどいことを言ったなと思いますが、人生とはわからないものですね。

その学校は後に、北海道教育委員会の「学校力向上総合実践事業」の指定校となり、指定後の取組で学校が劇的に良い方向へ変わっていきます。

紆余曲折がありながらも、子どもたちの成長のために全ての職員が同じ方向を向いて、みんなで協力して挑戦し続けると、職員に一体感が出てきてチームになっていく。やがて、子どもたちがより良い方向へ変わり、職員も大きく変わっていく。このようなプロセスを経て、最終的に学校が大きく変わりました。

当時、私は教務主任をしていましたが、「学校は自然に変わるのではなく、自分たちで学校を変えることができる！」と思ったことが、更に管理職を意識するきっかけとなりました。

「自分は管理職には向いていないな」と思っていたのですが、校長先生から「校長、教頭はやり甲斐があるよ」とか「自分の学級だけではなく、管理職は学校全体を見ていくのだよ」という話をされ、また、管理職の方々が入社してても上司としても素晴らしい方々だったので、その先生方から勧めていただけるのだから「管理職として頑張ってみよう！」と思ったことが管理職を志した理由です。

2・管理職になるために必要だった支援は、どのようなことですか？

「自分は管理職には向いていないな」と思っていたのですが、「管理職に向いているかどうかを考えるのは、自分ではないよ」と校長先生から言われ、「あっ、なるほどな」と思いましたし、管理職選考の受検前から「些細なことだけでも、教頭になったらこのような配慮をしていくといいよ」とか「学校の玄関の入り口は、大事なんだよ」など、本当に小さなことから教えてくださる方々が周囲にいました。私にはそのような後押しも必要だったと、今になって思います。

女性で自分から「管理職選考を受検します」と言う人はあまりいないと思いますし、力量が高い女性教員ほど「私は学級担任を続けたい」と話すことも多いので、やはり周囲からの後押しは必要だなと思いますね。

男性が管理職を目指す場合、女性に比べて家庭事情に左右されることは少ないと思いますが、力量が高い女性職員であっても、お子さんがまだ小さかったり、高校・大学受験を控えていたりする場合、「管理職は無理です」と話す人は多いので、家庭事情を抱える女性職員が管理職を目指すためには、家庭事情を考慮した支援が必要ではないかと思います。

3・管理職になって気づいたことは、どのようなことですか？

一番大きな気づきは、自分が思っていた以上に、いろいろな人、たくさんの方が学校のことを考えたり、支えたりしてくれていることです。

保護者はもちろんですが、地域の方々、市町教育委員会や渡島教育局の皆さん、本当に多くの方々が、こんなに学校のことを考えてくださっているのかと、あらためて気づかされました。教員の時は、どうしても自分の学級や保護者のことで精一杯になり、学校の中しか見えなくなる傾向がありますので、視野が広がったと思います。

当たり前のことではありますが、これだけ多くの方々が、一生懸命、親身になって学校のことを考えてくださっているのだから、「子どもたちを成長させていくために、学校もやれることをしっかりやらないといけない、頑張っていかなければならない」と、あらためて感じています。

もう一つの気づきは、自分自身が学び続けたいいけないこと。これはとても感じています。今までの経験だけでは学校は変わらないし、学校をより良くするためには、自分自身がアップデートし続けなければなりません。

教頭時代は「後ろには校長がいる」という意識で少し気が楽なところがあり、やりたいことをやらせていただきました。校長になっても、やりたいことをやらせていただいておりますが、決断するのは校長ですので、その決断が間違った方向に向かわないためにも校長は学び続けることが大事ですし、校長の責任の重さを感じています。

4・管理職のやりがいや魅力を、お聞かせください。

子どもたちと職員の頑張りや成長を、誰よりも感じられること。

そして、たくさんの人と出会いながら自分自身を高めていけるところが、やりがいや魅力だと思います。

また、子どもたちの良さ、先生方の頑張り、学校の素晴らしさを外部に発信できるのも管理職の魅力ですね。こんなにいい学校なのだから、地域の方々に学校の良さを広げて、地域と連携して更に素晴らしい学校にしていこう。それを進めていけるのが管理職と思っています。

あと、人の話を聞くことが、とても大事なんだなと感じています。保護者や地域の方々の様々なお話をしっかり聞いて受け止め、物事を円滑に前に進めていく。この大切さをとても感じています。やりがいとは少し違うかもしれませんが、管理職でないとできない仕事だと思います。

5・後輩教職員へのメッセージを、お聞かせください。

メッセージは5つあります。

(1) 新しいことにチャレンジして欲しい。

本校の先生方には私の考えを次のとおり伝え、協力をお願いしています。

- ・「失敗したらどうしよう」と恐れなくて、いろいろなことにどんどん挑戦して欲しい。
- ・「新しいことなので、これはどうかな?」と心配な時は、必ず管理職に相談して欲しい。
- ・その上で管理職がいいよと判断した時は、それをどんどん進めて欲しい。それで失敗したとしても、管理職が責任を負うので大丈夫。

子どもたちのために、先生方には新しいことに積極的に挑戦して欲しいです。特に若い世代には、若さを武器に挑戦して欲しいですね。

若い頃その感性には、こちらが気づかされるが多々ありますので、遠慮せずにチャレンジして欲しいです。もちろん大変な時はベテランの先生がサポートしますし、そのような働きやすい環境づくりは管理職の仕事です。

みんなで自由に話をしながら悩みを打ち明けたり楽しんだり、そのような環境づくりをしていかなければいけないなと思っています。

(2) 自分らしさを出して欲しい。

「あの先生がこうだから、私もこうしなくては」というような枠にはまった考え方ではなく、先生方のそれぞれの良さは違うので、自分の良さを発揮することに遠慮しないで欲しいです。

(3) 自然体で日々の仕事に臨んで欲しい。

無理をすると続かないので、構えることなく自然体で日々の仕事に臨んで欲しいです。それがきっと楽しんで仕事することに繋がると思います。物事がうまく進まない時は、管理職が助言したり軌道修正すればいいので、とにかく楽しみながら仕事をして欲しいですね。

先生方が楽しんで教室で子どもたちとふれ合えば、きっと子どもたちも学校に行くのが楽しいだろうなと思っています。

(4) 人間関係を大切にしたい。

人との繋がりを、是非、大切にしたいと思います。

困った時は話を聞いてもらえるし、様々なことに気づかせてもくれる。私たちの世代は管内の研究会などに参加し、自分のネットワークを広げたものです。

先生方が職員室にいる時は、職員室を歩きながら先生方とおしゃべりすることが多いです。授業時間は子どもたちの様子を見るため教室に行きますが、放課後、先生方と話をしていると、「今日、あの子、頑張っていたよね」とか「あの子の表情、ちょっと気になるよね」などの話をしたり聞いたり、また、先生が悩んでいる時もあるので、このような話から始まって話を膨らましていって、例えば「保護者と話をしてみようか」と解決への後押しをする。先生方とのコミュニケーションは、とても大切にしています。

(5) 休むことを、大事にして欲しい。

我々世代がやってきた夜中まで働くような仕事は、もうできなくなっていますし、やるべきではないと感じています。働き方改革も含めて、自分を大事にして欲しいと思います。

6・子育てを始める職員に対して、管理職として、どのようなことに気をつけていますか？

子育ては女性だけがするものではなく、男性と共に行うものなので、性別に関係なく子育て中の職員が遠慮せずに休みを取得できる、職場全体でフォローできる、困った時は助け合える環境づくりを、常に意識しています。

また、そのような環境づくりのためには、日頃から休みたい時は休める、勤務時間が終わったら帰れるような働き方改革を進める必要があります、そのためには管理職がどのように業務改善を図れるかが、大事になると思っています。

責任感からなのか、男性職員は子どもが熱を出しても帰ろうとしないことがあるので「いいから帰りな」と話して帰したり、「子どもが熱を出したら、奥さん一人では大変なんだから帰りな」と、無理やり帰らせたこともあります。

また、周囲を気にして「本当に帰っていいんですか？」と話す先生もいて「いいんですか？ではなく、帰りな」と話したこともありますね。

8・インタビューの最後となりますが、お伝えしたいメッセージはありますか？

以前に比べると、学校ではいい意味で女性・男性という性別が、世間的には意識されにくくなってきたかなと感じています。例えば、10～20年前であれば、学級担任が女性なのか男性なのか、保護者が気にする傾向がありましたが、今はそのような傾向も少なくなってきたと思います。

また、学校運営においても、以前であれば男性が中心的な役割を果たしている部分について、男性に頼ってしまうこともあったと思いますが、やはり「責任ある仕事は男性がやるだろう」とか「男性にやってもらう」という考えではなく、女性自身も変わっていかなければならないと思います。

私が教頭になった頃と女性管理職が増えてきた今を比較すると、女性管理職の印象も、いい方向へ変わってきたなと感じます。

ただ、ある日のこと、「校長先生は、おじいちゃんじゃないんだ～」と1年生の児童から言われたことがあったんです。その子には「そうだね～」と笑顔で話をしましたが、世間的にはまだ「校長先生は、おじいちゃん」という認識があるのでしょうか。

女性管理職が活躍することで、そのような認識も、いつか変わっていくのではないかと思います。

[インタビュー実施月:令和4年3月]

インタビューにご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。